

# 戦友録⑬ 「ほびっと」の中川六平さん そして70〜80代の老活動家たち

吉川 勇一



をやわらげようと、近くの市民プールに行くことにする。一日目の今日が昼過ぎに。おばあさ

■毎回本欄では60代の活動家の逝去のことを書くことになってしまふ。前号では戸井十月さん

だったが、今度は、作家の中川六平さんだ（ペンネームで、本名は中川文男だが、多くの知人は「六平さん」と言う）。9月5日、63歳、食道がんで死去された。

■六平さんは、70年代に、岩国市の米軍海兵隊基地の近くに、京都や広島、福岡などのベ平連活動家で作られた反戦スナック「ほびっと」のマネージャーだった。ベトナム戦争の中では、世界の多くの米軍基地の中で米兵の反戦活動が展開されたが、この岩国での活動は、世界の中で最も長く、最も活発で、戦闘的なものだった。

■六平さんの著書の一つ『ほびっと 戦争をとめた喫茶店——ベ平連1970-1975「ほいワクニ」(09年 講談社 1800円+税)は、この活動に詳しく、とても読みやすい必読書だろう。だが、六平さんには、『歩く学問』の達人(晶文社)、『天皇百話・上下』(鶴見俊輔共著、ちくま文庫)の著書があり、また編集者としては、『小沢昭一随筆随談選集』(全6巻、晶文社)や『鶴見俊輔座談』(全10巻、晶文社)など多数がある。

■六平さんのツイッターには、7月17日付で、「肩の痛み

んが十三人におじいさんが四人、もちろんその一人はぼく。いやはや、すごい光景です。本は、日本史の戦後史に漢字の戦後史。ここから何かを」と。という文が載っている。これらによると、肩が痛く、それは「おじいさんになった」と思っても、ガンがひどくなっているということはまったく自覚していなかったようだ。六平さんは、晶文社での内堀弘著『古本の時間』(本年9月刊)の編集が終わって、次にやろうと思っていた仕事の案や読書の予定などが机には多数並んでいたようで、本人も残念だと思っただろうし、私たちも残念だ。

■六平さんのお通夜は9月8日、葬儀は9日に、東京・東小金井の太陽寺で行なわれた。彼の人柄と実直な仕事に惹かれた人は多く、たくさん知人がお通夜にも葬儀にも全国の各地から列席した。そして、12月8日(日)1時には、京都市下京区富小路四条下るの徳正寺で「積六平\*百か日法要」が行なわれ、そのあと2時から「中川六平を語る会」がある。電話連絡は、075-1351-4156に。

■私も、「ほびっと」当時は、何度も岩国に出かけた。とくに、ベ平連の「ほびっと」が基地の

米兵から銃器を入手し、それを中核派活動家を通じてパレスチナの日本赤軍派に渡したとかいう、とんでもないデタラメで「ほびっと」が捜索され、大弾圧されたのに対し、私たちが裁判を起したが、その裁判には毎回のようには広島地裁に出かけた。この日米共同の大弾圧の詳しい事情はインターネットが利用できる方は、ぜひ以下の<http://www.jica.apc.org/~yoffice/Archive1-JiyunnoKikritm>を見て欲しい。

■ところで、話を一挙に変えて、80歳〜90歳代の仲間のことを触れておきたいのだ。みな、脚や腰が痛くなったり、いろいろな病気を抱えていて、デモンなどはなかなか難しくなっているのだが、今、一斉に同じようなメッセージを送ってきている。——「こうなったら、少しでも生き延びて、世の行く末を見極めて、ほんの少しの引っ掻き傷でも残してやりたいとあらためて思います。すっかり足萎えの老人になってしまった私に、何ができるかという思いはありますが、私たちを越えて先にあちらに行ってしまう連中のことも考えながら、やれることをやっていきたいと思えます……」、あるいは——「小生、すべての成人病(高血圧、糖尿病、前立腺炎)をかかえ込んでいますが、元気でやっています。百歳現役をめざして」などと言うのだ。

■60代の活動家の皆さん、ぜひ、ガンなどを、人間ドックなどで必ず検査し、私たち大老人に負けず、何としても早く死なないようにして下さい。お願いいたします。(写真は大本晴子)

(よしかわ・ゆういち/本会共同代表)